

平成二十九年 度 桜蔭中学校入学試験問題 (国語)

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて私が①ツトめていた高校は、二百余段の階段を上った高台の上に建っていた。大阪湾に②ノゾみ、水平線に沈む夕陽がとても美しかった。

夕陽は毎日のように見ていたはずだが、じつくり眺めたことはなかった。

ある日、夕焼け空があまりに美しかったので、気紛れに私は、日没までじつくり腰を据えて眺めてみようという気になった。見晴らしの良い場所に腰を下ろし、煙草を吸いながら西の空に目を遣った。

一時間半ほどもそうしていただろうか。

夕暮れの光景というものは、実に驚くべきパノラマであった。一ときも同じ状態に止まっていけない。刻々と色が変わる。陽の③ハえる雲もゆつくりと風に流れていくから、色だけでなく雲の形状も変わっていく。名前を知らない色が次々と現れては、名前を知らない別の色に変わっていく。こんなにも、見たことのない色があったのかと驚かされる。空が海で、雲はその海に浮かぶ島のようにも見えてくる。そしてこの不思議な風景の中を、関西国際空港から飛び立った飛行機が金色の尾を引いて過ぎっていく。太陽は、最後の強い輝きを放った後、加速度がついたように水平線へと没する。

私は心から堪能し、「見た」と思つて腰を上げようとした。

しかし素晴らしいのはここからだった。水平線に沈んだ太陽はまだ死んでおらず、海の向こう側にいて、下からの深い角度から雲の底部を照らし始めた。すると雲はそれまでとは全く違う陰影を帯びてきた。地獄が現れた、と思った。空がすっかりインディゴブルーに染まって暗く沈んでいくまでに、一体どれだけの造形美が立ち現れただろうか。

気が付くと、辺りはすっかり暗くなっていた。

立ち上がると、別世界から戻ってきた気がした。見つめるとは、こういうことかと思つた。私は生まれて以来無数の夕陽や夕焼け空を見てきたが、本当は何も見えていなかったのだと知つた。恐らく私はこれに限らず、この世界のほとんどのものをちゃんと見ずに生きてきたに違いない。A見つめるということは、頭の中の思い込みから自由になることであつた。

しかし何も知らないかのような純粹な目でものを見ることは、生きていく上では実に効率が悪い。夕焼けだな、と一瞬思うだけで、あとは頭の中の既知の夕焼けをなぞるだけで済みますことが最も楽で、そのようにして組み立てられているのが我々の日常生活であると言える。たと

注 1…じゅうぶんに満足すること 2…深いあい色 3…すでに知っていること 4…大地が肥えて実り多いこと 5…行き来すること

問一 ①②③④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 () a c にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

a ア 恐る恐る イ 雄々しく ウ あわただしく エ のんびりと

b ア 必死で イ 注意深く ウ 自由に エ きまじめに

c ア さびしげに イ 明るく ウ じまんげに エ 豊かに

問三 — Aの「頭の中の思い込み」とは、筆者の体験ではどういうものでしたか。具体的に説明しなさい。

問四 — Bと反対の世界を具体的に表している言葉を、— Bより前の部分から七字で見つけ、ぬき出して答えなさい。

問五 — Cとありますが、「こちら側の世界にない宝」とはどういうものですか。そして、それを「持ち帰って」くるとは、だれがどうすることですか。

え、じつくり見つめるならば限りなく豊饒で未知なる世界が堪能出来るとしても、そのように初めて見るかのような目で世界を見ることは多大なエネルギーを要する。ために鉛筆の先に④シンケイを集中させてみれば、その集中力は一分と持たないことが分かるだろう。夕焼け空を見つめていた時の私も、実は何度も気が散って度々見つめることから離れていたのである。それはひよっとすると、本能的な危険回避行動だったと言えるかも知れない。

ものを見つめ過ぎることには、どこか不気味なものを招き寄せてしまうところがあるのではなからうか。日没後の雲は地獄の風景を思わせた。その時の夕焼け雲はなじみのない異形のものであつて、こちら側にはない過剰なものを含んでいた気がする。周囲は一面雑木林で、もうとつぷりと暗く、生来臆病者の私は正直言つて空恐ろしかった。このまま向こう側に行ってしまうのではないかという怖さが、私を、手の中の煙草の火や、振り向いたらまだ灯りの点いている校舎へと何度も引き戻したのだろう。何かでこの世と繋がっておかなければやばい、という感覚は確かにあつたと思う。

恐らく世に詩人と呼ばれる人種だけが、私が立ち止まっていた地点を遙かに超えて、B向こう側の世界へと踏み込んでいけるだけの⑤シンツを持つているのではなからうか。彼らは (a) 向こう側の世界に飛び込んでいく。そしてあちら側とこちら側の世界とを (b)

往還し、Cこちら側の世界にない宝を持ち帰つてはこの世界を (c) 彩っていくのである。何と勇氣のある営みだろうか。

しかし当然それには危険が伴う。あちら側に行ったきり戻れなくなつてしまった詩人は、決して少なくないに違いない。逆に言うと、こちら側の世界に戻れなくなった人々は、ことごとく詩人であつたと言えるかも知れない。この危険な冒険に魅了されない芸術家はいない。個人的に私は、向こう側に行くのは文字通り死の時と思ひ定めている。人は皆ことごとく、死の瞬間には一線を越えて詩人の世界へと移行していくに違いない。死に背中を押してもらわないと、とても怖くて飛び込めないとこがいかにも私の二流なところであるが、二流には二流なりに「安全な離れた場所から見つめる」という役割がある。

あちら側は言語を超えた世界である。私はこちら側で、散文家としての仕事をする。

(吉村 萬壺『生きていくうえで、かけがえのないこと』)

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

線路わきのゆるい坂道を、連れ立った小学生が下りて来る。

落葉の始まった桜並木に沿って、黄や緑、赤などに着膨れた男の子や女の子が、前向きになったり、後ろ向きになったり、くるくる回りながら声高く下りて来る。卵色に紺色、それに鼠色の子もいる。陽は西に移っていた。

切り通しの線路なので、電車の音はいつも坂の下を流れてゆく。下りと上りの電車が擦れ違ふと話し声は途絶えた。誰かが口を嚙み、誰かがそれに倣い、次々に倣って高まった音の流れて消えるのを待った。誰かともなく柵に寄って、並んで下を覗いている。

「ぼく、ずっと前、空にいる象を見たことがあるよ」

沈黙を破ったのは緑色に着膨れた男の子である。すぐに、

「ええっ？ 象を？ うそ！ そんなのうそ！」

と黄色に膨んだ女の子が叫び、そのあと、「うそだあ！ うそだあ！」の声が続いた。

空は深く晴れている。

うそだあ！ と声を合わせた者も合わせなかった者も、一樣にその空を見上げている。ここからは見えないが、小学校の校庭には、まだ運動に熱中している生徒達が残っていて、彼等のあげる喚声は、この坂道にも時々もつれ合いながら伝わってきた。

「うそじゃないよ。本当なんだよ」

真顔で言い返している男の子に、大柄な鼠色の男の子が、低い、太い声で言った。

「あるわけないだろう、そんなこと。夢？ それとも……」

「ぼく、見た。テレビで見た。象が、象が空にいたんだよう」

「なあんだ、テレビか。そんならそうと早く言えよ」

そんならそうと、と言いはしたものの、想像が追いつかないので、彼は半分だけ納得し、半分は不貞腐れている。

「ねえ、聞いて聞いて。あたしなら空を泳いでいるピアノを見たことがあるわ」

左右の者を制するように、赤いマフラーの女の子が言った。低い、太い声が続いた。

「テレビや映画の話ならよせよ」

「違う。あたしはねえ、おばあちゃんのうちの二階の窓から、ちやあんとこの目で見てたんだから」

今度は周りも「うそだあ！」とは言わなかった。しかしそれは、この女の子の言ったことを誰もが認めたからではなかった。左右からの冷たい視線に、女の子はひるんだ。象を空に見たと言った少年も、空を泳いでいるピアノを見たと言った少女も、友達の意外な反応に出鼻を挫かれ氣勢を削がれて、それぞれあとを言いそびれてしまった。どちらも少しずつさびしかった。

いつのまにか小学生達は、又くるくる回りながら、再び坂を下り始めていた。彼等が背中の鞆に吊り下げている布袋入りのカップは、回り方が強いと、伸び切った吊り紐の先で円を描いた。大柄な男の子のカップが、卵色の女の子の腕に当たった。

「許せ」

と強気に言い捨ててから、彼はにわかに首をすくめ、腰を折ってその少女の前に回り、掌を合わせると、猫撫で声で、

「ごめんね」

と言った。

少女は笑顔を見せただけで何も言わなかった。この少女は、少し前、

柵に寄りかかった友達が「うそだあ！」と声を合わせていた時、象を見たという少年の言葉を、すぐに否定はできなかった。自分に同じ経験があったのではない。ただ、見る、見えるということに関して、少女には日頃から迷いがあった。たとえ自分に見えても人に見えないものは、見たことにはならないのか。もし自分が間違っているのなら、間違いとそうではないという見分けはどこでどうつけられるのか、という疑問があつて、当然答は簡単には得られないので、迷いは消えそうもないのだつた。

少女は、みんなにうそだとはやされている少年についてこう思っていた。日頃の態度や物言いからすると、彼は見えないものを見たとは言わないうだろう。人をびっくりさせたり、騙したりするのがうれしい友達ではない。それともう一つ、自分も彼のように、空に象を見たらいいなという漠然とした羨しさもあった。

この少女にも、みんなの前で言いたいことがないわけではなかった。けれども疑われたり、うそつき呼ばわりされたのでは、言おうとしている中味そのものがかわいそうなので、やはり言うのはやめようと思い、ひとり胸のうちに繰り返していた。「わたしは、木になった魚を見たのよ」

(中略)

朝の庭で蟬が鳴いている。鳴き始めは去年よりも早かった。

「これ、ベビーパウダーみたいね」

「お母さんは片栗粉かと思った」

卵色の少女と母親が、透明な、チャック付きの小さいポリ袋に詰められている塩を、左右から見詰め合っている。沖縄に出張している母親のすぐ上の兄が、近くの島の産物だと言って送ってきた。

袋の中の塩は、こまかい結晶ではなく真白な粉状で、毎日スプーンといわず、指先にも塩を当てている母親は、これでもお塩なのかと目力を入れた。母親は言った。

「雪塩って名前がついている。沖縄の周辺には島がたくさんあって、珊瑚礁で出来た島もあるのね。兄さんに聞いた説明では、珊瑚にしみとおった地下の海水を原料にしているの、私達のからだに大切なミネラルがいっぱいふくまれているんですって」

少女は、両手の指先で、ふくらんでいる袋のあちこちをつまんだ。母親には、いかにも湿気呼び易い、優美な自然塩だと思われた。

この母親には、二人の兄がいたが、少女は雪塩を送ってくれたこの下の伯父さんが好きだった。突然、

「①豚の卵と馬の角」

と言って、

「分る？」

と聞いたり、変に着飾っている女のひとを見て、

「ああいうのを、耳朶に口紅をつけているような人って言うんだよ」

などと真面目な顔をして言う。そういうところが気に入っている。未だに結婚していない。仕事柄、会社からはよく出張するし、自分も地球の上を出来るだけたくさん動いてみたいので、家族はいないほうがいいというのがおじさんの考えらしいと少女は思っている。

そういうば、おじさんからの塩は、今度が初めてではなかった。二三年前だった、その頃のおじさんのきんむ地は北海道で、オホーツクの海水一〇〇パーセントという、やはり今度と同じくらいの小袋に入っ

た焼塩が送られてきた。

「この塩を毎日食べて、女のひとはもつと美しくなつて下さい」

と書き添えてあった。この時の塩も、母親には結晶のこまやかさは見慣れたものと違っていたが、焼塩だったせいか、今度の雪塩のようにはおどろかなかった。

今年の夏休みは、そのおじさんが沖縄から休みをとつて帰つてくるというので、少女は、友達の誘いも断つたし、うちに誘うこともしなかった。学校の図書館だけでなく、住んでいる町の図書館にも出掛けて行つて、沖縄の自然や日常生活に関するものを、一冊でも多く見たり読んだりして、おじさんがどんなところで毎日を過ごしているのか知りたいと思つた。図鑑や図録の類は、ただ見ているだけで分ることもいろいろあるけれど、文章になると、すぐには分らない説明が次々に押し寄せてきて、言葉の意味を調べるのに横道に逸れる場合が少なくなかつた。それに、意味が分ればまだいいほうで、堂々巡りしながら自分はいったい何を調べていたのか分らなくなるようなことさえあつた。沖縄を知りたい気持ちとおじさんを知りたい気持ちがひとつになつていて、真夏日の連続にもくじけず、少女は大きな麦藁帽子をかぶつて図書館に通つた。

おじさんから、急に都合で島を離れられなくなつたという葉書が母親に届いた時、少女の夏休みもあと数日になつていた。

「あのひとは、いつもこうなんだから」

と②母親は少女に聞こえよがしにつぶやいて、娘の落胆に先回りした。

「その代りにいい物を送ります、つて書いてあるけれど、まさか今度も塩じゃないでしょうね」

母親は娘の顔を見ないままで続けた。

「あんなに一所懸命調べて待つていたのに」

それを言いたいののはわたしなのに、と少女は思い、いいわ、この次がもつとたのしみになる、そうも思つて口は開かなかつた。

葉書から二日後、沖縄からの航空便でマンゴーが届いた。三個並んでいる。

「家族三人、一人一個ずつ、のつもりかしら」

母親はそう言つて縦長の球形の果実が、ざくろの皮の色に近く濃い紅に熟れているのを取り、顔を寄せた。強い香りが南国だった。少女は、いつか友達の誕生祝に招かれた時、フルーツサラダの中にまじつている淡い橙色の果肉をマンゴーだと教えられたことはあつたが、近くでこうして丸ごと目のあたりにするのは初めてだった。少女の父親はいつたに果物の類を好まず、妻や娘にはすすめるものの、自分ときたら和菓子一辺倒であつた。いきおい、母親もマンゴーを丸ごと買うようなことはなかつた。

父親のつとめからの帰りを待ち、夜食の後、母親は報告のつもりで冷やしたマンゴーを皮つきのまま縦に三つに切り、大皿に一つずつ盛つてそれぞれの前に置いた。大きな目のスプーンを添えた。種が固くて自分の力ではとても割れないので、平たい種がついたままの果肉の部分は自分を取り、父親と少女には種なしの果肉をつけた。皮の外からはうかがいようもなかつた甘い芳香が漂つた。

父親は、手をつけないのは悪いと思つたのか、まっ先にスプーンを取つて、柔らかな橙色の果肉に当てた。

三人三様の沈黙の動きが続いた。

少女は、薔薇の花のエキスとアイスクリームが口の中で溶け合つていくような気がした。後味のきれいな甘みが、南の海の深い色と空の輝きを呼んで、あの島に行けば、海と空を見ながら毎日おじさんとこの果物が食べられるのかと思うと、浮き立つようだった。

③「西瓜でもない。メロンでもない……」

父親はひとりごとを言いながらほんの二口三口だけで、残りのマンゴー

①の皿を少女の方へ押しやつた。

母親は、

「何でも新しいうちがいいの。兄さん、本当にいい物を送つてくれたわ」と、唇の回りの果汁を片方の手の指先で拭き拭き、せわしくスプーンを口に運んだ。

洗い場に少女と一緒に皿を下げた。

長年炊事をしてきたが、梅干の種をわざわざ水で洗つたことはない。桃の種を洗つたこともない。それなのにどういうわけか、母親は皿に残っているマンゴーの種をそのまま捨てる気にならず、蛇口の下で洗い始めていた。洗いながら、美味しさのあまり種にまで執着しているのかという恥ずかしさもなくなつたが、洗い続けているうちに、おや、から、あら、に変わつて、水を止めると掌の内側にのせたままじつと見入つた。

種の全長は八、九センチメートル、幅は五、六センチメートル、いちばん厚いところのふくらみは二センチメートルか、せいぜい二・五センチメートルくらいで、扁平な楕円形の生糸色の種には、表面に数本、挟まれたような凹凸の縞目が走っている。その上、楕円形を横にして見た時の上側の縁には、白髪を逆立てたような毛立ちがあり、下側の縁にも少量の毛立ちがある。これがマンゴーなの？ とわが目を疑いながら、母親はその種を、模様のない若草色の皿の中に置いた。

次の日、種は乾いていた。ただ毛立ちの部分には、乾燥で弾力性が加わつた。高さは一〇メートルもあつて、厚い葉をつけるというマンゴーのあの美味しい果肉が、④しんにこういうものを抱えているのかと思うと、娘に見せておきたくなつた。娘を呼んだ。

若草色の皿の中を見るなり、あの卵色の少女は言つた。

「海のお魚が木になつている」

「……………」

母親はすぐには反応できなかった。言われてみれば、全体マンボウ形の魚で、上下の縁の毛立ちは背鰭と腹鰭に見えなくもない。いや、シッポを落された注皮剥ぎか。

海の魚が木に？

母親は少女の迷いのない言葉に不意をつかれたが、まさか、と思い、そのうちに、もしかすると、などと思い始めていた。

少女は、今夜はおじさんにマンゴーのお札の手紙を書くかと思つている。お札だけでなく、前々から教えてもらいたかつたことも書くかと思う。今日も又庭で鳴いていた蟬が、蝶でも蜻蛉でも人間でもなくて、蟬で生きているふしぎについて。そしてこのわたしが、マンゴーではなく、花でも鳥でも魚でもなかつたふしぎについても。あのおじさんなら、きっとやさしく教えてくれると思う。

(竹西 寛子「木になつた魚」)

注 魚の名前

問一 — ①について。これらはどういうもののたとえだと思いますか。

問二 — ②のようにしたのはなぜですか。

問三 — ③のようにしたのはなぜですか。父親の心情がわかるように説明しなさい。

問四 — ④について。「こういうもの」とはどういうものですか。このことばにこめられている母親の気持ちもわかるように答えなさい。

問五 — について。「言おうとしている中味そのもの」とは何ですか。また、「中味そのものがかわいそう」とはどういうことですか。

二〇〇字以内で述べなさい。(句読点をふくむ)

